

教材活用例(5) 「恐羅漢」

〔中学校第3学年 主題：自然に対する畏敬の念 内容項目：3の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

＜素材－恐羅漢－について＞

恐羅漢は、広島県山県郡安芸太田町と島根県益田市との境にあり、西中国山地国定公園に属す標高1346mの広島県最高峰の山である。恐羅漢周辺は1200m～1300mの山々が連なっている。冬には多いときで3m以上の積雪があり、雪質もよく、毎年多くのスキー客が訪れ、ウィンタースポーツを楽しんでいる。しかし、頂上付近は比較的なだらかに広がっているため、吹雪になって視界を遮られると、方角を見失うこともある。

恐羅漢の楽しみ方はウィンタースポーツだけではなく、春には山菜狩り、秋には紅葉狩りなどの散策が楽しめ、1年を通して雄大な自然を感じることができる。また、周囲はブナ林に覆われており、ブナの木の下は長い時間の中で層をなし、その中に水分や栄養分をたっぷりと蓄え、流れ出る水は太田川の豊かな川の流れを生み出し、瀬戸内海へと注いでいる。

本資料で扱っている恐羅漢での遭難事故は、平成20年2月3日に7名のスノーボーダーが行方不明になったものである。2日間の捜索で、広島県警察や自衛隊、地元の消防団など、のべ887名の方がこの捜索活動に携わっている。

【捜索活動の概要】

2月3日

遭難事故発生

ゲレンデのナイター照明を一晩中点し続けた

2月4日の捜索活動

6:00 前 第1次捜索隊として町消防団の2つの分団に出動要請

7:00 現地対策本部を設置

8:45 災害対策本部を設置

2班に分けて遭難者が目指したルートを検索（頂上付近の積雪1.5m）

旧羅漢山付近で、スノーボードで滑った跡のようなものを発見

10:00 第2次捜索隊として2つの分団に出動要請

12:58 広島県知事に自衛隊の派遣要請（陸上自衛隊第13旅団）

13:30 第1次捜索隊の捜索を中断

第2次捜索隊は、午前中の第1次捜索隊の捜索状況をもとに旧羅漢山付近を検索

17:30 第2次捜索隊は、悪天候のため少ない時間しか捜索できず、4日の捜索をすべて打ち切る

捜索活動終了後、現地対策本部にて5日の捜索体制を協議

翌5日午前7時から遭難者の目指したルートを重点的に捜索することを決定

第1次捜索隊に入っていた2名の幹部消防団員の動き

▽ 第1次捜索隊に入っていた山に詳しい幹部消防団員2名が、旧羅漢山付近で方向がわからなくなったと推測し、

第1次捜索隊の捜索終了後、島根県側（匹見）の独自調査を開始

▽ 調査の結果、島根県側に出ている可能性が強いと確信し、すでに決定していた5日の捜索場所の追加を要請

▽ 午後9時に捜索場所の追加を決定

2月5日の捜索活動

▽ 消防団と自衛隊による匹見捜索隊が、午前9時30分、遭難者全員を無事発見保護

発見場所：島根県益田市匹見町国道488号西側の広見川沿い

▽ 防災行政無線と事前の調査であらかじめ配置していた連絡員の携帯電話により、現地対策本部に報告

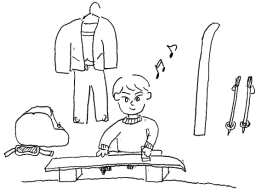
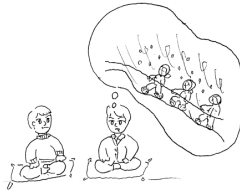
▽ 遭難者の負傷等の状況

3名が軽傷、4名は負傷等なし

ヘリコプターにて病院に搬送

(イ) 4コマ絵

本資料は恐羅漢での遭難事故を素材として扱っているが、遭難事故そのものを直接資料の中で描いていくのではなく、遭難事故を通して恐羅漢を見つめ直す主人公の心情の変化を4つの場面で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼いころから恐羅漢でよく遊んでいた、恐羅漢のことが大好きな主人公のひろし。幼いころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」の言葉が心に残っていた。そのひろしが翌日のスキー教室を楽しみに準備をしているところに、父が話しかけてくる。	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。1回目の捜索活動を終えて、捜索隊の休憩場所で若手の消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」とつぶやく。(遭難から第一日目の捜索終了まで。)	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。話を終えた後、父は「大きいんだよ、恐羅漢は…」と言い残して居間へ戻っていった。(第二日目の捜索から発見されるまで。)	翌日、ひろしはスキー教室で恐羅漢の頂上に立っていた。しばらくぼんやり辺りを見つめた後、ストックにグッと力をこめて握りしめ、斜面を滑り降りていった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

畏敬とは、「敬う」という意味での尊敬、尊重と、「畏れる」という意味での畏怖という面とが含まれている。自然とのかかわりを深く認識すれば、人間は様々な意味で有限なものであり、自然の中で生かされていることを自覚することができる。この自覚とともに、人間の力を超えたものを素直に感じとる心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えてくるであろう。また、この人間は有限なものであるという自覚は、自他の生命の大切さや尊さ、人間として生きることのすばらしさの自覚につながり、とかく独善的になりやすい人間の心を反省させ、生きとし生けるものに対する感謝と尊敬の心を生み出していくものである。

恐羅漢ではスキー教室が行われ、生徒たちにとって恐羅漢は身近な存在として感じられている山である。しかし、恐羅漢の自然の雄大さや美しさなどに対して敬う気持ちや、自然はそういった面ばかりではなく、厳しく、恐ろしい姿も持っているという捉えが浅い。その双方の自然の姿を見つめさせることで、自然が人間の力を超えた大きな存在として認識され、畏敬の念が深まると考えられる。

本資料では、子どもの頃から恐羅漢で遊び、祖父から恐羅漢の自然の雄大さを聞かされて育ってきている主人公を設定した。その主人公が遭難事故での恐羅漢の知らなかった一面を知らされることで、恐羅漢に対する見方が変わってくる構成としている。「母なる山、恐羅漢」や「恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった」、「大きいんだよ、恐羅漢は…」などをキーワードとしながら、自然への畏敬の念を深めさせていきたいと考えている。



【心に響くちょっといいはなし】

実際の捜索活動では、2名の地元消防団員の機転が遭難者の発見を早めている。当時、恐羅漢ゲレンデ側の捜索に多くの人員が動員されており、匹見町方面への捜索へは20名程度があたっていた。遭難者はスノーボードをしていて行方不明になったことから、ゲレンデ側を中心に捜索をしていた。しかし、実際は吹雪の中で方角を見失い、匹見町方面に滑り下りていっていたのである。そのことに気付いたのが2名の消防団員で、厳しい自然の捜索環境の中でも、あきらめず人命救助のために努力する姿がそこにはあった。

古くから匹見町に暮らしていた人々にとって、遭難者が匹見町に下りてくる可能性があることは、経験から感じていた。そこで、匹見町の人々は遭難者が町に下りてきたときに安心できるように雪道に足跡をいろいろな場所に残していたのである。恐羅漢の自然とともに生きてきたこの地域の人だからこそのできた行為であり、匹見町の地域の人々の温かさも感じられる。

ウ 資料全文

「恐 羅 漢」

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰り、ずっとスキーの手入れをしていた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノー⁽¹⁾といって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリ⁽²⁾やナルコユリ⁽³⁾などの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした秘密基地のようになっており、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその秘密基地で遊んでいると、祖父がやって来た。

「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」

「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」

ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさん水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかぬ。」

「母なる山、恐羅漢？」

ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」
と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしがその雪を見て、
「このぐらゐの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」
と言うと、隣で新聞を読んでいた父は、降り続ける窓の外の雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月3日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月4日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは体がかんじき⁽⁴⁾を掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた2つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」
すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。
「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじつとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の捜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での捜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから2日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月5日の朝がやってきた。匹見町での捜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名がたった。捜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には15センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ。」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

- (1) 水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。
- (2) 日本特産で日本を代表するユリ。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。
- (3) 山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追ひ払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。
- (4) 雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるもの。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「大きいんだよ、恐羅漢は」というキーワードに着目し

自然への畏敬の念を考える展開

～話し合い活動を生かした指導～

(ア) 主題名 自然に対する畏敬の念 3－(2)

(イ) ねらい 祖父や父から恐羅漢の話を聞いた主人公が、恐羅漢に対する見方が変化していく心情に共感することを通して、自然に対する畏敬の念を深める。

(ウ) 資料名 「恐羅漢」

(エ) 学習指導過程

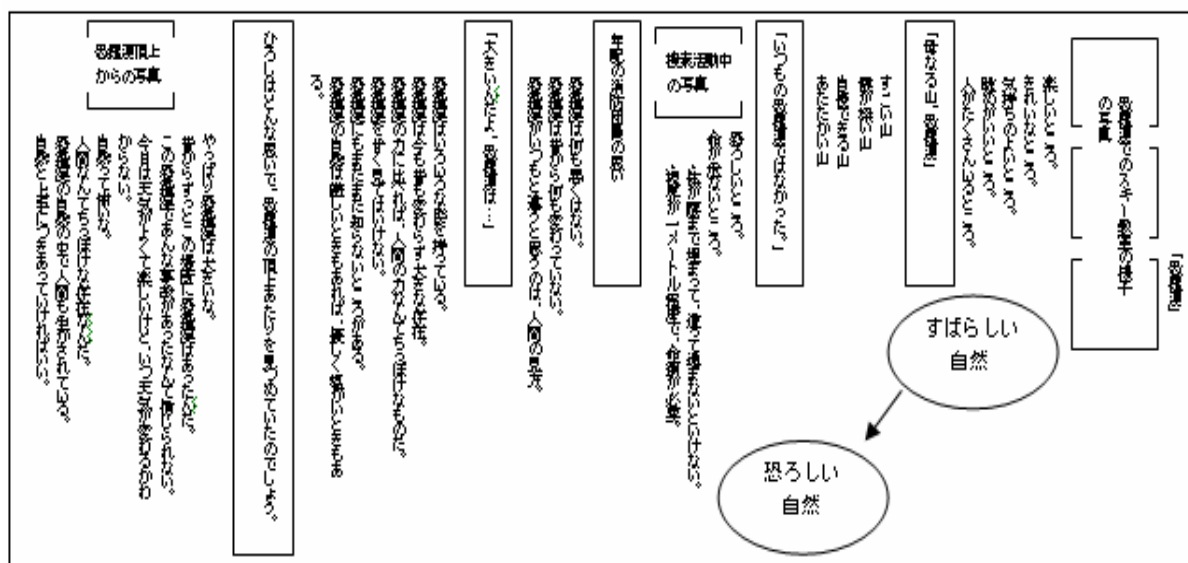
	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	○留意点 ☆評価の観点
導 入	1 恐羅漢でのスキー教室の様子を振り返る。 (スキー教室の様子を撮影した写真)	○ スキー教室で恐羅漢のことをどんな風に思っていますか。 ・楽しい所 ・きれいな所 ・気持ちいい ・眺めがいい所 ・滑りやすい雪質 ・人がたくさんいる	○ 恐羅漢でのスキー体験を振り返らせることで、プラスのイメージをしっかりと引き出したい。
展 開	2 資料の前段を読む。 ○ ひろしが幼い頃から感じていた恐羅漢について考える。 3 資料の中段を読む。 ○ いつもと違う恐羅漢の状況に気付く。 ○ 午前中の搜索を終えたあと、年配の消防団員は何を伝えようとしているのかを考える。	○ ひろしは、「母なる山、恐羅漢」ということばから、恐羅漢に対してどんな印象をもったでしょう。 ・すごい山 ・懐が深い ・自慢できる山 ・あたたかい山 ○ 「いつもの恐羅漢ではなかった」とはどんなところが違っていたのでしょうか。 ・怖いところ ・命に関わる ・体が腰まで埋まって、はって進まないといけない。 ・視界が1メートル程度 ○ 年配の消防団員は何を伝えようと思ったのでしょうか。 ・恐羅漢は何も悪くない。 ・恐羅漢は昔から何も変わっていない。 ・恐羅漢がいつもと違うと思うのは人間の見方。	○ 生徒が気付いていない、恐羅漢の「敬」の部分を考えさせる。 ○ 恐羅漢の自然のすごさについて考えさせる。 ○ 恐羅漢での搜索活動での厳しい様子を出させる。 ○ 若い消防団員が「こんな恐羅漢は初めてだ。」と言った言葉に対して、年配の消防団員が言っていることに注目させる。 ○ 恐羅漢への見方が変わるの、人間の勝手な見方によることに気付かせる。 ○ 今回の搜索活動では600名を超える人が携わるほどの大きな事故だった

	4 資料の後段を読む。 ◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしがどんなことを感じたかを考える。 ○ 恐羅漢の頂上に立っているひろしの気持ちを考える。	◎ 父が「大きいんだよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはどんなことを感じたでしょう。 ・恐羅漢は色々な姿をもっている。 ・恐羅漢は今も昔も変わらず大きな存在だ。 ・恐羅漢の力に比べれば、人間の力なんてちっぽけなものだ。 ・恐羅漢を甘くみてはいけない。 ・恐羅漢のことは何でも知っているなんて思っていない。 ・恐羅漢の自然は厳しいときもあれば、やさしく温かいときもある。 ○ ひろしはどんな思いで、恐羅漢の頂上から、あたりを見つめていたのでしょうか。 ・やっぱり恐羅漢は大きいな。 ・昔からずっとこの場所に恐羅漢はあったんだ。 ・この恐羅漢であんな事故が起こったなんて信じられない。 ・今日は天気がよくて楽しいけど、いつ天気が変わってどうなるかわからない。自然って怖いな。 ・人間なんてちっぽけな存在なんだな。 ・この恐羅漢の自然の中で自分も生かされているんだ。 ・自然と上手につきあっていければいいな。 ・恐羅漢の色々な面を知った上でスキーを楽しもう。	たことを伝える。（その内の20名が匹見町での捜索に携わった。） ○ 学習プリントに記入させる。 ○ 自然の力は人間の力がおよばない程大きなものであることに気付かせる。 ○ ひろしが小さいころに祖父から聞いた「母なる山、恐羅漢」と遭難事故とを照らしながら、恐羅漢の大きさについて考えさせる。 ○ 厳しさだけでなく、温かさもあることに気付かせる。 ○ 恐羅漢とともに生きてきた匹見町の人々の姿にも目を向けさせる。 ☆ キーワードに対する多様な見方や考え方を交流することにより、自ら自然に対する畏敬の念を深めることができたか。 ○ 祖父や父の言葉から感じたひろしの心情を振り返らせる。 ○ 自然の畏怖の部分だけでなく、その懐の深さに気付かせたい。 ○ 恐羅漢の風景が今までとは少し違って見えていたことに注目させる。
終末	5 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを視聴する。	○ 恐羅漢の四季の自然を描いたDVDを見て、恐羅漢の自然について考えてみよう。	○ 恐羅漢のDVDを視聴させることで、自然への畏敬の念を疑似体験させる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例



【板書の構成】

板書では、恐羅漢の自然に対するすばらしさ（敬）と恐ろしさ（畏）を対比的に表し、最終的には、「大きいんだよ、恐羅漢は……」ということばに象徴されるように、「畏敬」につながるように板書していく。そのことで、恐羅漢の自然には「畏敬」の両面が存在することに気付かせていく。

また、恐羅漢の自然を視覚的に捉えさせるために、写真等も活用すると効果的である。

(キ) ワークシート

「恐羅漢」

年 番 名前

父が「大きくなったよ、恐羅漢は……。」と言ったのを聞いて、ひろしはふんふんを
感じたでしょう。



(2) 活用のポイント

本資料では、生徒達がもっている恐羅漢の自然に対する畏敬の念をさらに深めることをねらいとしている。「敬」については、スキー教室で感じている恐羅漢の自然のすばらしさを、四季を超えた時間の流れの中でさらに深く感じさせていきたい。「畏」については、遭難事故の様子を振り返らせることで、普段は見せない恐羅漢の恐ろしさを感じさせていきたい。さらには、そういった畏敬は、人間の存在を超えた大きなものとして感じさせていくことが肝要である。その点を踏まえて、以下のような活用の工夫が考えられる。

ア 発問の工夫

本資料には、生徒に注目させたいことばがある。それは、最初に祖父が主人公に言っている「母なる山、恐羅漢」と最初の搜索活動を終えたあと若い消防団員が言っている「こんな恐羅漢は初めてだ」である。これらの言葉は、恐羅漢の自然を象徴することばで、いろいろな姿をもつ恐羅漢を想像することができる。しかし、これらの恐羅漢像はすべて人間がつくりだした勝手な見方で、恐羅漢は恐羅漢でしかないという、恐羅漢の自然の大きさ（畏敬）に迫っていくことが大切である。そのために、話を終えた父が最後に主人公に向けて言っている「大きいんだよ、恐羅漢は……」に注目させ、「大きい」には、恐羅漢の外観上の大きさだけでなく、色々な面をもち、人間の存在を超えた大きな存在としての「大きい」の意味に気付かせていきたい。

イ 話し合い活動の工夫

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」や「その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。」という場面を通して、その言葉の意味をじっくり考えさせ、恐羅漢に対してもったイメージを話し合わせることで、中心価値に迫っていききたい。

ウ 体験活動を生かした工夫

本資料は、生徒がスキー教室で体感している恐羅漢の自然を糸口に、自然への畏敬の念に迫る資料である。導入では、スキー教室を通して感じている恐羅漢の自然をしっかりと出させ、資料の中で

描かれている恐羅漢の自然と対比させる中で考えさせていくことができる。

エ 資料提示の工夫

生徒が感じている恐羅漢の自然は、冬のスキー教室で感じているものが多いと考えられるので、恐羅漢の自然を四季を通して感じさせることで、自然への捉えを広げさせていくことが必要である。

(3) 授業の実際～児童生徒の反応を踏まえて～

ア 発問の工夫

「母なる山、恐羅漢」と「いつもの恐羅漢ではなかった」を対比させることで、恐羅漢の「敬」と「畏」の両面を感じさせることができた。その上で、「大きいんだよ、恐羅漢は……」の意味を考えさせることで、自然の懐の深さを感じさせることにつながった。

イ 話し合い活動の工夫

実際の授業の中で生徒たちは、「大きいんだよ、恐羅漢は……」ということばを受けて、次のような発言をしている。

- ・楽しくもあり、恐ろしくもある山。
- ・長い歴史の中で恐羅漢の自然がつくられている。
- ・人が思うようには動かない程の大きさをもった山。
- ・人も飲み込んでしまう程の大きな存在。
- ・恐羅漢は、美しいだけではなく、自然の恐ろしさを伝えてくれる大きな存在。
- ・親のような偉大な山。

これらの発言からも、生徒たちが本資料や授業を通して、恐羅漢の様々な姿に触れ、人間の存在を超えた大きな存在として自然を考えてきていることが分かる。

ウ 体験活動を生かした工夫

導入でスキー教室の写真などを提示していきながら、スキー教室で感じている恐羅漢の自然などについて思いをしっかりと引き出すことができた。また、授業に対する関心を引きつけることができた。

エ 資料提示の工夫

生徒が知っている恐羅漢の自然は、スキー教室での雪景色の自然がほとんどであるが、冬以外の季節の恐羅漢の自然に触れることで、恐羅漢の自然に対する見方が広がった。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

生徒は、小学生のときから恐羅漢でスキー教室を体験しており、とりわけ冬季の恐羅漢の自然のすばらしさは十分に感じている。それらの思いをしっかりと出させることで、本資料と自分たちの思いをつなげていくことが大切である。その一方で、冬季以外の恐羅漢の自然については、十分な知識や体験がない生徒が多いので、資料中に出てくる冬季以外の恐羅漢の自然環境のすばらしさにも気付かせていくことで、恐羅漢の自然に対する「敬」の部分を広げることも大切である。

また、本資料で出てくる遭難事故当時のような荒れ狂う恐羅漢の自然環境を、生徒が直接的に体験することはできない。そのことを踏まえて、搜索活動中の厳しい自然の状況をしっかりと感じとらせることに留意する必要がある。

自然が身近な場所にある生徒にとって、自然のすばらしさについてあらためて実感する場面は多くない。そのために、お花見弁当やもみじ狩り弁当などの季節行事を設定し、地域の自然の豊かさやすばらしさを再認識する場を設定することが、自然に対する畏敬の念を深めることにつながる。

(5) 心のノートを活用

本資料は資料の内容を考えていくことで、自然に対する畏敬の念の価値の一般化をはかることができると考えるが、より広げるために、「心のノート」PP. 78-79 の「大自然に何を想う」を活用し、そこにある文章を通して、自然を一般的なものに捉えて考えさせることもできる。

このことで、授業の中で考えた恐羅漢の自然の大きさを、その他の自然に置き換えて考えることができる。

